

(2) 調査振り返りより

調査振り返りのうち、インタビューガイドに関連する「調査に参加をして苦労したところ」と「調査の際に工夫したところ」の2つの項目に着目した。そしてそれらの項目に関する回答の中で、インタビューガイドの使用に関するものを取り上げた。

その結果、「調査に参加をして苦労したところ」という項目については、「調査項目の表現が難しいので質問する方も聞かれる方も大変だった」、「調査項目の表現を言い換えるのが難しかった」、「相手によって調査項目の表現を言い換えるのに時間がかかった」といった意見が、「調査の際に工夫したところ」として、「質問について具体例をあげたり具体的に質問をしたりした」、「具体的に短く聞いた方が質問の内容をわかってもらえた」といった意見がそれぞれあげられた。

これらのことから、調査振り返りから見えてくるインタビューガイドを用いた面接調査の留意点として、調査項目の表現をよりわかりやすく具体的にすることが必要になることがうかがわれた(表3)。

表3 調査振り返りより

| | |
|-----------------|---|
| 調査に参加をして苦労したところ | <ul style="list-style-type: none">・調査項目の表現が難しいので質問する方も聞かれる方も大変だった・調査項目の表現を言い換えるのが難しかった・相手によって調査項目の表現を言い換えるのに時間がかかった |
| 調査の際に工夫したところ | <ul style="list-style-type: none">・質問について具体例をあげたり具体的に質問をしたりした・具体的に短く聞いた方が質問の内容をわかってもらえた |

(3) まとめ

以上インタビューガイドを用いた面接調査の留意点について、調査振り返りシートと調査振り返りの結果から概観したが、これらに共通しているものとして、質問内容をわかりやすくすることが必要だということがあげられた。このことに関連して、調査振り返りの中の「今後改善すべき点」という項目の中で出てきた意見として、「調査項目の検討から当事者に参加してもらいたい」というものがあつたが、インタビューガイド作成の際にはその初期段階から障害当事者にも議論に加わってもらい、障害当事者にとってわかりやすい設問の検討を行うことが必要であることが示唆された。

4. 障害当事者による面接調査の留意点

障害当事者による面接の際の留意点について、調査の後に行った障害当事者である調査員による調査振り返りの結果から考察をしたい。

(1) 調査振り返りより

調査振り返りのうち、障害当事者による面接の際の留意点に関連する「今後改善すべき点」という項目に着目した。そしてその項目に関する回答の中で、障害当事者による面接調査の留意点に関するものを取り上げた。

その結果、「今後改善すべき点」という項目については、「調査が初めての人には記録者の他に支援者をつけたほうが良い」、「支援者をつける場合調査の前に何度か顔合わせをしたほうが良い」といった意見があげられた。

これらのことから、調査振り返りから見えてくる障害当事者による面接調査の際の留意点として、調査の際に支援者をつけることが必要であることがうかがわれた。

表4 調査振り返りより

| | |
|----------|---|
| 今後改善すべき点 | ・調査が初めての人には記録者の他に支援者をつけたほうが良い ・支援者をつける場合調査の前に何度か顔合わせをしたほうが良い |
|----------|---|

(2) まとめ

障害当事者による面接調査の際の留意点について調査振り返りから概観したが、その中で調査の際に支援者をつける必要性が指摘された。この支援者について、調査振り返りをさらに掘り下げて見て行くと、「記録者と支援者は分けたほうが良い、1人が全てのことをやろうとすると負担になる」という意見が出されており、記録者とは別に支援者を用意する必要性が指摘されていた。

また、支援者について「変わらないほうが良い」という意見が出された反面、「その場によって変わっても良い」という意見も出されたが、もし変わる場合には支援情報の伝達が必要になるということが指摘された。

また、支援者にはどのような人が望ましいかということについては、「気が合えばよい」、「支援者というよりは友だちというほうが良い」という意見が出されたが、同時に「その道の専門家ではないほうが良い」、「自分の(当事者活動の)支援者がグループホームの世話人だが、その場合グループホームの利用者と同じように見られてしまう」との意見も出された。そのため、この場合の支援者とは友だちのように気安く付き合うことができ、管理性が排除された人が望ましいということがうかがわれた。

このように、当事者による面接調査の際には支援者をつける必要性が指摘されたが、それは記録者とは別に支援を専門に行う人が想定されており、管理的ではなく友だちのように気安く接することができる人が望ましいということが示唆された。

5. 面接調査の際のツール

調査実施にあたって知的障害当事者である調査員から、調査の際に調査項目を絵と文字とで示す絵カードを用いた方が対象者の理解を得やすいとの指摘があった。そのため、奈良崎氏に調査項目を絵と文字とで示した絵カードの作成を依頼し、対象者とのコミュニケーションを図るために用いることとした。その際、○×△?によって対象者の意思確認をするための○×△?カードが同時に作成され、絵カードとあわせて用いることとした。

なお、これら絵カードや○×△?カードは主に言葉でコミュニケーションをとることが

難しい対象者に対して用いられ、調査振り返りシートの中でその有効性が指摘されていた。

写真 絵カード

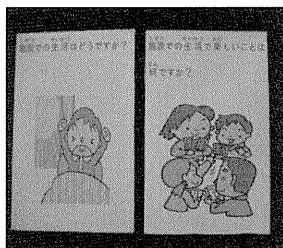
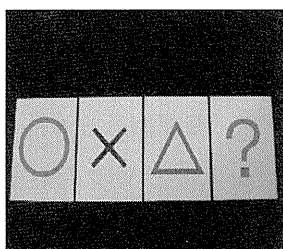


写真 ○×△?カード



6. 入所者に対する意思確認方法について

言葉などでコミュニケーションをとることが難しい入所者に対する意思確認方法について、調査対象施設である旧知的障害者入所更生施設の職員3名と旧身体障害者療護施設の職員1名に対して聞き取り調査を行った。なお、その際の調査項目は、「対象者とのコミュニケーションのとり方について」、言葉でコミュニケーションをとることが難しい人に対する「ニーズ把握の方法について」、「コミュニケーション技法について」、「支援充足度の評価について」、「支援計画の作成方法について」であった。

これらの項目のうち、「対象者とのコミュニケーションのとり方について」では、対象者の表情や行動、前後関係や気持ちなどを見極めるといった「状態を見極める」ということ、あいまいな返事はしない、具体的に答えるといった「働きかけ方に注意する」ということ、対象者に働きかけや声かけをしたり、物や写真を提示したり、実際にその場面を見てもらったりするといった「働きかけの反応を見る」ということがそれぞれあげられた。

また、言葉などでコミュニケーションをとることが難しい入所者に対する「ニーズ把握の方法について」では、その人に実物を提示したり、実際にやってみたりしてそれらの反応から判断するといった「働きかけの反応を見る」ということ、その人の表情や態度や雰囲気を見たり、その人の表情から快不快を読み取ったりするといった「状態を見極める」ということ、保護者と相談をしたり職員同士で話し合いをするといった「確認を行う」ということがそれぞれあげられた。

また、「コミュニケーション技法について」では、写真を提示したり一緒に過ごしたりしてニーズの見極めをするといった「働きかけの反応を見る」ということがあげられた。

また、「支援充足度の評価について」では、表情や笑顔や行動で判断するといった「状態を見極める」ということ、やってみた結果や反応や表情で判断するといった「働きかけの反応を見る」ということがそれぞれあげられた。

また、「支援計画の作成方法について」では、ニーズに対する欲求や表情をとらえるといった「状態を見極める」ということ、その人自身や家族に確認をするといった「確認を行う」ということがそれぞれあげられた。

これらのことから、言葉などでコミュニケーションがとりにくい入所者に対する意思確認方法については、その人の状態を見極め、反応を見つつ働きかけを行い、その働きかけ方にも注意を払い、適宜本人や家族に確認を行うことが必要になるということがうかがわれた。

表5 意思確認方法

| | |
|--------------------------|---|
| <p>コミュニケーションの取り方について</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・その人の表情を見て判断する ・その人の前後の行動や表情などにも注意している ・事柄の前後関係や本人の気持ちを確認する ・好きなこと面白いと思っていることを発見してその表情をする時が好きなことをしている時と判断して支援する ・言葉のオウム返しに気をつける ・あいまいな返事はしない ・具体的に伝える ・質問はできるだけ簡単にしている ・課題の中でも良い部分に着目しどのように対処すべきか提示する ・その人に働きかけや声かけをして判断する ・スキンシップをとったり、物を提示したり写真を提示したり、実際にその場所を見てもらったりして判断している ・質問を書いてみせる ・○か×かどちらかを選択してもらう ・本当に本人の意思によるのか確認をするために同じ内容の違う質問をすることもある |
| <p>ニーズ把握の方法について</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・実物を提示してみる ・実際にやってみる ・反応から判断する ・場面を作って把握する ・行動を見ながら判断する ・本人がわかるキーワードを言葉にして積み重ねる ・文章でわからない方には図示ををして説明する ・表情や態度や雰囲気を見る ・表情から本人の快不快を探りその結果を職員間で話し合う ・笑っているから良いということではなくその際も確認をする ・今までの保護者の接し方を参考にする ・保護者と相談をする ・職員同士で話し合いの場を持ちながら対応する |
| <p>コミュニケーション技法について</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・自閉の方で作業に集中できない場合など決まった働きかけ方がある ・その場その場で写真を提示することはある ・一緒に過ごして見極めをして本人と振り返りを行うしかない |

| | |
|----------------------|--|
| <p>支援の評価方法について</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・表情などで判断することが多い ・笑顔が見られたりだとか活動的であったとか楽しそうだったとか ・生活のリズムが崩れるということが満足をしていないサインだと思う ・やってみた結果による ・反応や目つきによる |
| <p>支援計画の作成方法について</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ニーズに対する欲求やその表情をどのようにとらえるか、1つ1つ手探りでやっている ・本人の表情からニーズを把握する ・今その方に必要なことを考え、楽しいことを中心とし、できた方が良いことを少しずつ取り入れる ・本人に個別支援計画について話を聞いてもらうのが一番だと思う ・保護者にその年の支援計画について確認をし、要望を基に修正をしつつ本人にも確認を行う ・保護者からのニーズを把握する |

Ⅲ. 入所施設調査のまとめ

本調査では、入所施設調査として、知的障害者分野、身体障害者分野、障害児分野について調査を実施した。その際、知的障害者分野では(旧)知的障害者入所更生施設を、身体障害者分野では(旧)身体障害者療護施設を、障害児分野では肢体不自由児施設をそれぞれ対象とした。なお、調査対象施設はそれぞれ関連団体の推薦を受けて確定した。

1. 調査対象施設の概要

調査対象施設の概要として、対象となった旧知的障害者入所更生施設 2 か所、旧身体障害者療護施設 1 か所、肢体不自由児施設 1 か所の概要を以下に記す。

(1) (旧)知的障害者入所更生施設

A 施設

平成 14 年開所。法人として、障害者支援施設(施設入所支援、生活介護、短期入所、日中一時支援)、ケアホーム、相談支援事業所、居宅介護支援事業所、移動支援事業所を運営している。日中活動は 5 つの班に分かれて利用者のニーズに合わせたものを提供している。居室は 1 部屋 1 名もしくは 2 名が利用している。

B 施設

昭和 49 年開所、平成 19 年改築。法人として、障害者支援施設(施設入所支援、短期入所、生活介護、就労継続支援)、グループホーム・ケアホーム、相談支援事業所を運営している。日中活動は利用者のニーズに応じて、請負作業、出向請負作業、自主製品作成を行っている。居室は 1 部屋 1 名が利用している。

(2) (旧)身体障害者療護施設

C 施設

平成 9 年に開所した旧身体障害者療護施設。障害者自立支援法には平成 20 年に移行。実施事業としては、施設入所支援、生活介護、短期入所、児童デイサービス、地域活動支援事業、障害者相談支援事業、日中一時支援、精神障害者地域移行特別対策事業を実施している。

(3) 肢体不自由児施設

D 施設

昭和 17 年に開所。現在の施設は昭和 54 年に建設。法人として、外来療育部門、肢体不自由児施設、重症心身障害児施設を運営している。日中は幼児は幼児保育室、児童は特別支援学校に通い、18 歳以上の入所者は週に数回施設内の日中活動の場に通っている。居室は 1 部屋 4 人もしくは 6 人が利用している。

2. 対象者の選定方法

対象者の選定は各施設の入所定員の 1 割程度を目安とし、乱数表を用いたランダムサンプリングにより行った。その際、障害の程度によって対象者を限定することはしなかったが、心身上の状態により調査を行うことで対象者に不具合が生じることが想定される場合はそれらの者を対象者から除外した。なお、肢体不自由児施設では 18 歳以上で次の生活の場を模索する必要がある者全員を対象とした。その結果、A 施設で 8 名、B 施設で 6 名、C 施設で 8 名、D 施設で 3 名が対象者として抽出された。

3. インタビューガイドの説明

本調査では、インタビューガイドを作成して調査を実施した。このインタビューガイドは先行研究(長野県障害者地域生活支援研究会 2008; 長野県社会福祉事業団 2008; 北海道 2009)を参考にしつつ、障害者入所施設の実情を勘案した上で項目を作成し、知的障害当事者である調査員が表現をわかりやすく修正した上で確定した。なお、インタビューガイドの項目は以下の通りである(表 6)。

表6 インタビューガイド項目

1. 施設での生活はどうか？
2. 施設での生活で楽しいことはありますか？
3. 施設での生活で嫌なことはありますか？
4. 施設での生活でやってみたいことはありますか？
5. 施設での生活で好きなことができますか？
6. 施設での生活で担当している仕事はありますか？
7. 職員との仲はどうか？
8. 一緒に暮らしている仲間との仲はどうか？
9. 地域で暮らしたいですか？
10. 地域で暮らしてやってみたいことはありますか？
11. 地域で暮らすのに怖いことはありますか？

4. 調査に用いたツール

知的障害当事者である調査員から、調査の際に調査項目を絵と文字とで示したカードを用いた方が対象者の理解を得やすいとの指摘を受けた。そのため、その調査員に調査項目を絵と文字とで示す絵カードの作成を依頼し、対象者とのコミュニケーションを図るために用いることとした。その際、○×△？を指し示すことによって対象者の意思確認をする○×△？カードも作成されたので、絵カードとあわせて用いることとした。

写真 絵カード

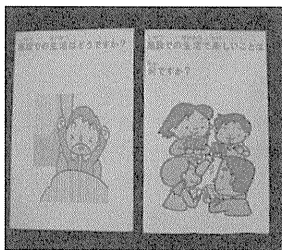


写真 ○×△？カード



5. 対象者の基礎属性

対象者の基礎属性を以下に記す。

(1) (旧)知的障害者入所更生施設

性別は男性7名、女性7名であった(表7)。年齢は、23歳から61歳であり、平均が39歳であった(表7)。主な障害は知的障害の他に、ダウン症、てんかん、ADHD、統合失調症、適応障害、気分障害、肢体不自由が見られた(表7)。療育手帳等級は、最重度が3名、重度が3名、中度が4名、軽度が4名であった(表7)。障害程度区分は6が3名、5が6名、4が5名であった(表7)。入所期間は1年から17年であり、平均が8年であった(表7)。直前の居住形態は自宅が10名、施設が2名、病院が2名であった(表7)。なお、調査対象者14名のうち、言葉でコミュニケーションを取ることが難しい対象者が3名であった。

対象者の傾向を施設ごとに見ると、A施設では障害程度が重い者が多い傾向にあるのに対して、B施設では重複障害の者が多い傾向にあった。

表7 対象者の基礎属性 ((旧)知的障害者入所更生施設)

施設 A

| ID | 性別 | 年齢(歳) | 主な障害 | 手帳 | 区分 | 入所期間(年) | 直前の居住形態 |
|----|----|-------|------------|----------------------------|----|---------|---------|
| A | 男 | 49 | 知的障害 | 療育手帳(中度) | 4 | 9 | 自宅 |
| B | 男 | 47 | 知的障害、肢体不自由 | 療育手帳(軽度)、 身体障害者手帳(1種3級) | 6 | 9 | 病院 |
| C | 男 | 34 | 知的障害 | 療育手帳(最重度) | 6 | 9 | 自宅 |
| D | 男 | 27 | 知的障害 | 療育手帳(最重度) | 5 | 9 | 自宅 |
| E | 女 | 35 | 知的障害 | 療育手帳(重度) | 5 | 9 | 自宅 |
| F | 女 | 43 | 知的障害、ダウン症 | 療育手帳(中度) | 5 | 9 | 自宅 |
| G | 女 | 61 | 知的障害 | 療育手帳(重度) | 6 | 8 | 自宅 |
| H | 女 | 46 | 知的障害 | 療育手帳(最重度) | 5 | 1 | 自宅 |

施設 B

| ID | 性別 | 年齢(歳) | 主な障害 | 手帳 | 区分 | 入所期間(年) | 直前の居住形態 |
|----|----|-------|-----------------|----------|----|---------|---------|
| I | 男 | 32 | 知的障害 | 療育手帳(軽度) | 5 | 9 | 施設 |
| J | 男 | 46 | 知的障害 | 療育手帳(中度) | 4 | 17 | 自宅 |
| K | 男 | 23 | 知的障害、ADHD、てんかん | 療育手帳(軽度) | 4 | 2 | 施設 |
| L | 女 | 32 | 知的障害、統合失調症、てんかん | 療育手帳(重度) | 4 | 7 | 施設 |
| M | 女 | 32 | 知的障害、適応障害、気分障害 | 療育手帳(軽度) | 5 | 6 | 病院 |
| N | 女 | 36 | 知的障害、てんかん | 療育手帳(中度) | 4 | 2 | 自宅 |

(2) (旧)身体障害者療護施設

対象者の基礎属性は以下の表 3 の通りである。

表 8 対象者の基礎属性 ((旧)身体障害者療護施設)
施設 C

| ID | 性別 | 年齢 (歳) | 主な障害 | 手帳 | 区分 | 入所期間 (年) | 備考 |
|----|----|-----------|--------|----------------------------|----|-------------|---------------------------|
| A | 男 | 49 | 脳性まひ | 身体障害者手帳(1種1級) | 5 | 14 | 難しい表現は苦手 |
| B | 男 | 50 | 脳性まひ | 身体障害者手帳(1種1級) | 5 | 14 | 言語障害があるものの、理解力は高い |
| C | 男 | 70 | 脳性まひ | 身体障害者手帳(1種1級) | 6 | 14 | 言語障害があり、両耳が聞こえにくい |
| D | 男 | 55 | 脳梗塞 | 身体障害者手帳(1種1級) | 4 | 2 | 失語症あり |
| E | 女 | 58 | 脳性まひ | 身体障害者手帳(1種1級) | 5 | 10 | 言語障害があるものの、理解力は高い |
| F | 男 | 52 | 脊髄損傷 | 身体障害者手帳(1種1級)、 療育手帳(中度) | 6 | 3 | 知的障害があり、療育手帳の等級は中度 |
| G | 男 | 55 | 脳炎 | 身体障害者手帳(1種1級) | 6 | 14 | 発話は見られるが、会話としては成立しない |
| H | 男 | 60 | 多発性硬化症 | 身体障害者手帳(1種1級) | 6 | 14 | 自発的な発話は少なく、日常的な意思決定や伝達も困難 |

今回の調査対象者のコミュニケーションに配慮すべきことをまとめると、以下の表 9 になる。表出コミュニケーションとは、本人が相手に伝える力、受容コミュニケーションは、本人の理解能力と言える。

その結果、本調査の対象者は、コミュニケーションに問題のある人が多い傾向にある。本人の理解が難しく、発している言葉も理解できなかった人が G さん。また、知的障害をもともと持つ F さん、抽象的な質問の理解は困難な A さん、H さんと受容コミュニケーションに何らかの配慮が必要であるという人は、4 名であった。旧身体障害者療護施設の全国調査 (385 施設が回答、回収率 93.4%) によれば、身体障害者と知的障害を重複する入所者は、1 施設当たり、平均 15.9 人いるとされ、入所定員数の平均が 58.3 人であることから、単純には約 27% の割合を占めていると言える。(全国社会福祉協議会・全国身体障害者施設協議会 2006)。一概に、身体障害と知的障害の重複の障害を持つことが受容コミュニケーションに障害を持つということではないが、本調査の対象者は決して特異な事例を対象としたのではないことがわかる。

一方、表出コミュニケーションに着目すると、本人は理解しているだろうが、失語症のため、何を言っているのかほとんど分からなかった人が D さん。その他に、一言、二言のみ発言する H さんがいた。また、B さん、C さん、E さんはそれぞれ言語障害を持っていた。

表9 コミュニケーションの種類別対象者像

| ID | 表出コミュニケーション | 受容コミュニケーション |
|----|-----------------|----------------|
| A | 理解可能 | 抽象的な表現を避ける必要あり |
| B | 言語障害あるもわかる | 普通の声かけで理解可能 |
| C | 言語障害あるも半分程わかる | 聞こえにくい |
| D | 失語症がありほとんどわからない | 抽象的な言葉はわかりにくい |
| E | 言語障害があるもわかる | 普通の声かけで理解可能 |
| F | 理解可能 | 抽象的な表現を避ける必要あり |
| G | 会話不可能 | 会話不可能 |
| H | 単語を話す | 抽象的な表現は避ける |

(3) 肢体不自由児施設

性別は男性2名、女性1名であった。年齢は19歳から22歳までであり、平均が20歳であった(表5)。主な障害は脳性まひの他に知的障害、てんかん、中枢性尿崩症が見られた(表10)。身体障害者手帳は1種1級が2名、1種2級が1名であった(表10)。入所期間は4年から15年であり、平均が11年であった(表10)。直前の居住形態は3名全員が施設であった(表10)。なお、対象者3名全員が言葉でコミュニケーションを取ることが難しかった。

表10 対象者の基礎属性(肢体不自由児施設)

施設D

| ID | 性別 | 年齢(歳) | 主な障害 | 手帳 | 区分 | 入所期間(年) | 直前の居住形態 |
|----|----|-------|-----------------------|---------------|----|---------|---------|
| A | 男 | 19 | 脳性まひ、てんかん、知的障害 | 身体障害者手帳(1種1級) | | 15 | 施設 |
| B | 男 | 19 | 脳性まひ、てんかん、知的障害、中枢性尿崩症 | 身体障害者手帳(1種2級) | | 4 | 施設 |
| C | 女 | 22 | 脳性まひ、てんかん、知的障害 | 身体障害者手帳(1種1級) | | 14 | 施設 |

6. 調査手順

調査は2回実施し、1回目と2回目の調査の間に地域生活に関する情報提供として、地域で生活する障害当事者による講話を行った。調査はインタビューガイドを用いた半構造化面接により行い、調査員はインタビュアーと記録者に分かれ、対象者の真のニーズを把握するために同じ障害の当事者がインタビュアーを務めた。

なお、肢体不自由児施設については対象者の障害の程度を考慮して調査は1回実施し、障害当事者による講話は行わなかった。また、対象者と言葉でコミュニケーションをとることが難しかったためインタビューガイドを用いた半構造化面接は行わず、生活場面において対象者に働きかけを行いながら、その様子を観察することによって生活上のニーズを探ることとした。但し、対象者のニーズをその行動から把握するには限界があったので、対象者の生活実態とニーズ把握の方法について担当職員から聞き取りを行った。その際、対象者への働きかけは障害当事者である調査員が中心となり、担当職員への聞き取りはそれ以外の調査員が中心となった。

7. 倫理的配慮

調査は日本社会事業大学の研究倫理審査を受けた上で実施した。その上で、調査に際しては対象者に調査概要の説明を行い、協力が得られる場合は原則として書面により同意を得た。また、調査を行う際に録音の可否の確認をし、同意が得られた場合のみ録音を行った。なお、調査員も個人情報保持について書面により誓約を行った。

8. 調査結果

それぞれの調査結果について、以下にまとめる。

(1) 知的障害分野

1回目調査と2回目調査の結果について、録音データから逐語録を作成し、その内容をインタビューガイドの項目にあわせて整理した。その際に、各項目の回答に対応した逐語録データを一部引用した。なお、その際の逐語録データは各項目の回答内容を具体的に示しているものを採用した。また、逐語録データでは、Aが対象者、Bがインタビュアー、Cが記録者をそれぞれ現わしている。

また、1回目調査と2回目調査の間に当事者講話を行った。これは、地域で生活をする知的障害当事者の話を聞くことで、対象者の地域生活に対する意識が変化するか否かを検証するためのものである。

1) 1回目調査結果

① 施設生活について

a.感想

施設での生活の感想について尋ねたところ、「良い」が6人、「悪い」が4人、「普通」が1人、「無回答」が3人であった(表11)。

またその詳細として、「良い」では「楽しい」が、「悪い」では「迷惑をかける利用者がいる」、「トラブルがある」、「責任を持たされる」などがそれぞれあげられた(表11)。

【施設生活が良い(楽しい)】

A：楽しい。

B：楽しい。例えばどんなところが楽しいですか？どんなことが楽しい？例えば、そうですね。カラオケが好きとか。ゲームがみんなとして楽しいとか。友だちができることとか。何かありますか？

A：カラオケとね、テープ。

B：カラオケと何？テープ？

A：テープ。

B：テープ聞くのが好きなんですか？へー。音楽好きなんですね。

A：そう。

【施設生活が悪い(迷惑をかける利用者がいる)】

A：やっぱりね。一番悪い入所以外はね。3階で走る人もいるし。ちょっとね。みんなに迷惑かかりますね。

B：走る人がいる。

A：何かXさんっていう人ね。何かバタバタバタバタバタバタバタバタバやってね。何か走るとね。何か夜中まで走ってくるんですよ。

B：えー、うるさい。

A：うるさくなって、ちょっと眠れなくなっちゃって。もう、ちょっと、みんなに迷惑なんですよ。

b.楽しいこと

施設での生活で楽しいことについて尋ねたところ、「ある」が11人、「無回答」が3人であった。(表11)。

またその詳細として、「ある」では「おしゃべりをする」、「のんびりする」、「テレビを見る」などがあげられた(表11)。

【楽しいことがある(おしゃべりをする)】

A：おしゃべりすること。

B：お話すること。そっか。お話することが楽しいですか。例えばどんなお話しますか？

A：「今日休みだから買い物しよっか」とか。

B：へー。

c. 嫌なこと

施設での生活で嫌なことを尋ねたところ、「ある」が7人、「ない」が3人、「無回答」が4人であった(表11)。

またその詳細として、「ある」では「他の利用者から暴力を振るわれる」、「ノックをしないで部屋に入る利用者がいる」、「施設の中を走る利用者がいる」などがあげられた(表11)。

【嫌なことがある(他の利用者に暴力を振るわれる)】

A：人に殴っちゃったり。人に、殴っちゃったの、頭に。

C：殴られたんですか？殴ったんですか？

A：殴っちゃったの。パンフレットが見せてくれって。

C：パンフレットを見せてくれって言われてたたかれたの？

A：たたかれた。チラシも見せてって言われて。

C：チラシ見せてって言われて、見せなかったらたたかれた？

A：そう。

d. やってみたいこと

施設での生活でやってみたいことを尋ねたところ、「ある」が9人、「無回答」が5人であった(表 11)。

またその詳細として、「ある」では「歌を歌う」、「絵を描く」、「本を読む」などがあげられた(表 11)。

【やってみたいことがある(歌を歌う)】

A：歌もっと歌いたい。

B：歌歌いたい。歌を歌いたい。歌を歌いたいんですね。例えば、何の歌が好きですか？

A：モーニング娘とかコブクロとか。

B：すごい難しい歌歌うな。そっか。そうですね。へー。そっか。歌が好きなんですね

Aさんは。

e. 好きなこと

施設での生活で好きなことができているか尋ねたところ、「できている」が6人、「無回答」が8人であった(表 11)。

またその詳細として、「できている」では「おいしいものを食べる」、「のんびりする」、「テレビを見る」などがあげられた(表 11)。

【好きなことができている(おいしいものを食べる)】

B：何が好きですか？

A：いっぱい。

B：いっぱい。特に一番好きなことを教えてください。

A：やっぱりおいしいものを食べること。

f. 担当している仕事

施設での生活で担当している仕事を尋ねたところ、「ある」が10人、「無回答」が4人であった(表 11)。またその詳細として、「ある」では「作業」、「掃除」、「運動」があげられた(表 11)。

g. 職員との仲

職員との仲を尋ねたところ、「良い」が5人、「どちらともいえない」が4人、「悪い」が1人、「無回答」が4人であった(表 11)。

またその詳細として、「良い」では「仲が良い」、「優しい」が、「どちらともいえない」では「良い時と悪い時がある」、「だいたいは」、「仲が良い職員もいる」が、「悪い」では「あまり好きではない」がそれぞれあげられた(表 11)。

【職員との仲はどちらともいえない(良い時と悪い時がある)】

A：良い時と悪い時があります。

B：良いところと悪いところ。もし良かったら教えてもらって良いですか？

A：良いところは良く親身になって話を聞いてくれるところ。

B：悪いところはどうでしょう？

A：うーん、ちょっと言い方がきついところ。

B：ちょっと怒っちゃうのかな？

A：怒っているような感じがするところ。

B：そうなんですね。

h.利用者同士の仲

利用者同士の仲を尋ねたところ、「どちらともいえない」が 5 人、「良い」が 3 人、「悪い」が 3 人、「無回答」が 3 人であった(表 11)。

またその詳細として、「どちらともいえない」では「嫌な利用者も良い利用者もいる」、「苦手な利用者もいるけど友だちもいる」、「時々けんかもする」などが、「良い」では「仲が良い」、「友だちがいる」が、「悪い」では「友だちがいない」、「うまくいっていない」、「友だち関係が嫌」などが、それぞれあげられた(表 11)。

【利用者同士の仲はどちらともいえない(嫌いな利用者も良い利用者もいる)】

A：仲間ですか？仲間は嫌いな人いますね。

B：そういう時は。仲間はいやな人もいるけど。

A：良い人もいる。

【利用者同士の仲は悪い(友だちがいない)】

A：仲が良い友達はいないかな。

B：さびしいですね。

A：う、うん。ちょっと、ちょっと頭にくる。

② 地域生活について

a.意向

地域生活をしたいか尋ねたところ「したい」が 6 人、「したくない」が 4 人、「どちらともいえない」が 1 人、「無回答」が 3 人であった(表 11)。

またその詳細として、「したい」では「1人暮らしをしたい」、「家族と暮らしたい」が、「したくない」では「施設で暮らしたい」がそれぞれあげられた(表 11)。

【地域生活をした(1人暮らしをした)】

A：あー、それはもう決まっています。

B：1人暮らし？

A：1人でやっていきたいですね。

B：わかりました。ですよ。うん。

【地域生活をしたくない(施設で暮らしたい)】

A：ここは出たくない。

B：施設にはいたい？

A：いたいです。

B：はい。

b. やってみたいこと

地域で暮らしてやってみたいことについて尋ねたところ、「ある」が9人、「無回答」が5人であった(表 11)。

またその詳細として、「ある」では「音楽を聞きに行く」、「テレビを見る」、「物語を書く」などがあげられた(表 11)。

【地域でやってみたいことがある(音楽を聞きに行く)】

A：音楽見に行きたい。

B：音楽見に行きたいの？誰の音楽行きたいですか？

A：きよし。

B：きよし？きよしさんも好きなんだ。

A：そう。

B：そっか、氷川きよしだっけ？何とかきよしね。

A：うん。

B：へー、きよしさんのどこが好きですか？

A：たっ、たっ た た た た。

B：きよしー。すごーい。そうなんだ。きよしさんの歌を聞きに行きたい。

A：うん。

B：そうですか。今までは行った時は？ありますか？

A：ない。

B：ないんだ。それじゃあ行きたいですよ。

A：うん。

c.怖いこと

地域で暮らすのに怖いことを尋ねたところ、「ない」が3人、「ある」が2人、「無回答」が9人であった(表 11)。

またその詳細として、「ある」では「火事」、「交通事故」、「わからないこと」があげられた(表 11)。

【怖いことがある(火事)】

A：ちょっとねえ。グループホームの人がちょっとね。何か火事に。火災があって。

やっぱりねえ。ちょっと難しいので。ちょっとやめておこうかなと思って。

B：そうなんですか。

A：はい。

B：ほー。

A：火事になっちゃったらね。ちょっと、みんなに迷惑かかるので。

B：ああ、そうですね。

A：やめようかなと思って。

B：はい、わかりました。

表 1 1 1 回目調査結果

| | | | | | |
|----------|-----------|-----------|---|----|--|
| 施設生活 | 感想 | 良い | 6人 | 内容 | 楽しい |
| | | 悪い | 4人 | | 迷惑をかける利用者がいる、トラブルがある、責任を持たされる、楽しくない |
| | | 普通 | 1人 | | 普通に過ごしている |
| | | 無回答 | 3人 | | |
| | 楽しいこと | ある | 11人 | | おしゃべりをする、のんびりする、テレビを見る、カラオケをする、歌を歌う、音楽を聞く、本を読む、字を書く、おもちゃで遊ぶ、トランプをする、ご飯を食べる、歯を磨く、調理実習をする、仕事をする、忘年会、新年会、クリスマス会、買い物に行く、食事に行く、お茶しに行く、お墓参りに行く |
| | | 無回答 | 3人 | | |
| | 嫌なこと | ある | 7人 | | 他の利用者に暴力を振るわれる、ノックをしないで部屋に入る利用者がいる、施設の中を走る利用者がいる、利用者同士でトラブルがある、他の利用者とのトラブルが解決できないとストレスになる、食事の際に他の利用者に邪魔をされる、他の利用者にいじめられる、利用者同士のトラブルを職員が解決してくれない、職員とうまくいかない、責任を持たされる、健康上食事制限がある |
| | | ない | 3人 | | |
| | やってみたいこと | ある | 9人 | | 歌を歌う、絵を描く、本を読む、物語を作る、ビデオを見る、ゲームをする、車を洗う、格闘技を習う、結婚する、おいしいものを食べる、歯を磨く、調理実習をする、作業をする |
| | | 無回答 | 2人 | | |
| 好きなこと | できている | 6人 | おいしいものを食べる、のんびりする、テレビを見る、本を読む、音楽を聞く、おもちゃで遊ぶ | | |
| | 無回答 | 8人 | | | |
| 担当している仕事 | ある | 10人 | 作業、掃除、運動 | | |
| | 無回答 | 4人 | | | |
| 職員との仲 | 良い | 5人 | 仲が良い、やさしい | | |
| | どちらともいえない | 4人 | 良い時と悪い時がある、だいたい仲が良い職員もいる | | |
| | 悪い | 1人 | あまり好きではない | | |
| | 無回答 | 4人 | | | |
| 利用者同士の仲 | どちらともいえない | 5人 | 嫌な利用者も良い利用者もいる、苦手な利用者もいるけど友だちもいる、時々けんかもある、何人かは、ちょっと怖い | | |
| | 良い | 3人 | 仲が良い、友だちがいる | | |
| | 悪い | 3人 | 友だちがいない、うまくいっていない、友だち関係が嫌 | | |
| | 無回答 | 3人 | | | |
| 地域生活 | 意向 | したい | 6人 | 内容 | 1人暮らしをしたい、家族と暮らしたい |
| | | したくない | 4人 | | 施設で暮らしたい |
| | | どちらともいえない | 1人 | | 家族と暮らしたいし施設でも暮らしたい |
| | | 無回答 | 3人 | | |
| | やってみたいこと | ある | 9人 | | 音楽を聞きに行く、テレビを見る、物語を書く、車を洗う、旅行に行く、ゲームセンターでゲーム、お祭りに行く、就職する、働く、給料をもらう、結婚をする、友だちを作る、資格を取る、勉強をする、外での生活、1人暮らし、両親と暮らす、買いすぎに注意、アニメキャラクターになる |
| | | 無回答 | 5人 | | |
| 怖いこと | ない | 3人 | | | |
| | ある | 2人 | 火事、交通事故、わからないことだらけ | | |
| | | 無回答 | 9人 | | |

2) 当事者講話

1 回目の調査の後、対象者と希望者に対して当事者講話を行った。これは、地域で生活をする障害当事者の話を聞くことで、地域生活に対する対象者の意識が変化するか否か検証を行うためのものである。当事者講話プログラムは知的障害当事者である調査員の奈良崎氏にその趣旨を説明した上で内容の検討を行い、実施を依頼した。当事者講話プログラムの詳細は以下の通りである。

なお、当事者講話は A 施設と B 施設の両方で行ったが、A 施設では 9 名、B 施設では 40 名の対象者とその他希望者の参加があった。

① 自己紹介

知的障害当事者である講師の奈良崎氏と参加者がそれぞれ自己紹介を行った(表 12)。

② タオル体操

アイスブレイクの一環としてタオルを用いた体操を行った(表 12)。

③ 調査振り返り

対象者のうち、A 施設で 3 名、B 施設で 2 名に調査の振り返りをしてもらった。その際、A 施設では「色々な話ができうれしかった」、「絵を見ていて楽しかった」、「楽しかった」といった声が、B 施設では「職員に言えないことが言えた、良かった」、「施設は楽しい、嫌なことは無い」といった声がそれぞれ出された(表 12)。

④ 当事者講話

地域で生活をしている知的障害当事者の奈良崎氏に講師をお願いし、家族のこと、学生時代のこと、社会人になってからのこと、についてそれぞれ話をしてもらい、障害者余暇活動や当事者活動の様子も紹介してもらった(表 12)。

⑤ 絵を描く

参加者に自分がこれからどのような生活を送りたいのかについて絵や文章を書いてもらった(表 12)。

⑥ 発表する

書いてもらった絵や文章を基に、参加者にこれからどのような生活を送りたいのか発表をもらった。その際、大きく分けて「将来したいこと」と「将来の生活形態」について発表があった。その中で、「将来したいこと」については、A 施設では「役所で働きたい」、「小説家になりたい」、「ケーキ屋になりたい」といった意見が、B 施設では「野球選手になりたい」、「相撲取りになりたい」、「宝塚女優になりたい」といった意見がそれぞれ出された(表 12)。また、「将来の生活形態に」については、A 施設では「このままが良い」、「ここにいたい」、「1 人暮らしをしたい」といった意見が、B 施設では「地域で暮らしたい」、「好きな人と生活をしたい」といった意見がそれぞれ出された(表 12)。

表 1 2 当事者講話プログラム

| | | | | |
|--------|--|----------|---------------------------------------|--|
| 自己紹介 | 障害当事者である講師と参加者がそれぞれ自己紹介を行った | | | |
| タオル体操 | アイスブレイクの一環としてタオル体操を行った | | | |
| 調査振り返り | 対象者に1回目の調査を振り返ってもらった | A施設 | 色々な話ができてうれしかった 絵を見てて楽しかった 楽しかった | |
| | | B施設 | 職員に言えないことが言えた、良かった 施設は楽しい、嫌なことは無い | |
| 当事者講話 | 地域で生活をする知的障害当事者に、家族のこと、学生時代のこと、社会人になってからのこと、についてそれぞれ話をしてもらい、障害者余暇活動や当事者活動についても紹介してもらった | | | |
| 絵を描く | 参加者に自分がこれからどのような生活を送りたいのかについて絵や文章を書いてもらった | | | |
| 発表する | 書いてもらった絵や文章を基に、参加者にこれからどのような生活を送りたいのか発表してもらった | 将来したいこと | A施設 | 役所で働きたい 小説家になりたい ケーキ屋になりたい 花屋になりたい 絵描きになりたい |
| | | | B施設 | 野球選手になりたい 相撲取りになりたい 宝塚女優になりたい バスの運転手になりたい 電車の運転手になりたい 設計士になりたい 介護福祉士になりたい お店をしたい 人並みの生活を送るために仕事をしたい 悔いのない生活を送りたい 人の世話をしたい ペットのセラピーをしたい 旅行に行きたい 野菜を作りたい 太鼓をたたきたい 自転車のタイヤ交換をしたい |
| | | 将来の生活の形態 | A施設 | ここにいたい このままが良い 1人暮らしをしたい アニメキャラクターと生活したい 結婚したい |
| | | | B施設 | 地域で暮らしたい 好きな人と生活をしたい |

3) 2回目調査結果

① 施設生活について

a.感想

施設での生活について尋ねたところ、「良い」が7人、「悪い」が3人、「普通」が1人、「無回答」が3人であった(表 13)。

またその詳細として、「良い」では「楽しい」、「好き」などが、「悪い」では「嫌だ」、「トラブルがある」がそれぞれあげられた(表 13)。

【施設生活が良い(楽しい)】

A：楽しい。

B：楽しい？

A：うん。

B：何が一番楽しい？

A：うーんと。

B：何が楽しい？Aさん。

A：絵描いたりとか。